

人が人と出会う。会話が生まれる。信念を持つ人間同士が会話すると衝突することも当然有り得る。その時曲げられない信条がぶつかるとその仲は決裂する。事なかれで丸く収めることがどうしてもできない我武者羅さを持っていた幹部隊士が新選組に存在した。彼の名は永倉新八(ながくらしんぱち)。

新選組。京都守護職に属し、主に反幕府勢力の鎮圧にあたった剣客集団ですが、単純な疑問があります。それは、‘新選組の中で、一体誰が一番強いのか’ということ。

なんだか『バキ』っぽい話なんですが、剣客集団である以上、非常に興味深い話題です。以下、明治維新後に語られた、興味深い証言を紹介します。元新選組隊士で、途中、敵方の御陵衛士(ごりょうえじ)に寝返った阿部十郎は、維新後の史談会での談話で、その問いに対し「沖田総司。これがまあ勇の一弟子で、なかなかよく遣いました。その次は斎藤一と申します。それからこれは派が違いますけれども、永倉新八という者がおりました。この者は沖田よりはちと稽古が進んでおりました」と語っています。剣の優劣に関する証言はこの他にも二つ存在するのですが、実際、隊士として剣術の稽古に励んだ人物のものは阿部のもののみ。純粋に一に永倉、二に沖田、三に斎藤の順とっていいでしょう。彼は、‘武’と‘信条’の両面で非常に質実剛健な性格の持ち主でした。

永倉新八は、天保10(1839)年9月、江戸詰めの蝦夷松前藩士、長倉勘次の次男として生まれました。剣術を良くし、神道無念流免許皆伝、そして武術修行の折に、近藤勇と出会い、勇らとともに上京。新選組では、剣の腕を買われ、二番組長、剣術師範を務めました。池田屋事件では親指の付け根の肉を削がれながらも奮闘したようです。とにかく我武者羅だったようで、付いたあだ名は‘ガム新(しん)’。いいですね。最高の褒め言葉です。ところが、このガム新は敵だけでなく、味方に対しても我武者羅だったようです。「局長近藤は池田屋以降、尊大になり本来同志である自分たちに対して家来のように扱う。このことを近藤が申し開きできるのであれば、自分たちは切腹し、できなければ、近藤を切腹させてほしい」と組の保護者、京都守護職会津藩に直訴しました。その場は会津が近藤との仲をとりなし、ことなきを得ますが、勇との確執は残ったようです。慶応4(1868)年1月3日鳥羽・伏見の戦端が開かれ、敗北した新選組は大坂に落ち、天保山から海路江戸に渡ります。3月6日、新選組は甲州(山梨)勝沼で新政府軍と戦いますが、これにも敗退。江戸に戻った永倉は、会津藩と合流して再戦しようと、その旨近藤に持ちかけました。しかし、近藤は「あくまでも新選組は会津の先兵として戦う」としてこれを拒否、「自分の家来となるのであればこの意見を聞き入れる」と最後の言葉を掛けました。ついにガム新との確執は決定的なものとなり、ここに近藤と永倉は決裂します。彼は組を脱退後、原田左之助ら数名の旧新選組隊士とともに、知人の幕臣、芳賀直道(はがぎどう)と靖共隊(せいきょうたい)を結成し、会津戦争に参戦。敗北が濃厚になると米沢藩に援軍を求め、奔走します。しかし、米沢、会津の降伏が決定したことにより、彼の戊辰戦争は終りを告げました。9月末のことでした。

戦線離脱した彼は江戸の松前藩邸に帰参を願い出て、明治2(1869)年2月認められました。明治4(1871)年1月北海道に渡った永倉は藩医、杉村松伯の娘、よねと結婚、杉村家の養子となり、杉村義衛(ぎえい)となります。

維新後の杉村義衛は、近藤勇が処刑された、東京板橋に近藤、土方らの墓碑を設立。また、札幌農学校や樺戸郡月形町の樺戸監獄での剣術指南役などを務めたようです。明治32(1899)年以降は、小樽に定住、隠居の身となります。小樽新聞の記者に、彼の維新時代を語った回想録、『新撰組顛末記』、隊での行動手記『浪士文久報国記事』などを残し、生き証人として晩年を過ごし、近藤らを家来でも上司でもなく、あくまでも同志として弔ったのです。

現在、札幌市厚別区にある北海道開拓記念館には、ご子孫が寄贈された永倉新八使用の、泥と血に染まった陣羽織(チョッキ)が収められています。羽織に直に記された、彼の座右の歌はこうあります。

武士(もののふ)の 節を尽くして 厭(あ)くまでも 貫現(つらぬ)く竹の 心一筋

新選組二番組長、永倉新八。彼は、遺した歌に違うことのない武と信条を併せ持つ、ガム新でした。

追記: 図らずも平成22年という年は、僕にとって転機(てんき)の年になった。身の回りに起きた幸せな事や不幸な出来事。そして旅に出る直前に自分の身に振り掛かった苦境。本当に様々なことが起きた。その傍らで今まで精神的な柱となり、時に憧れに近い感情を抱かせてくれた存在が、旅先でも頭によぎった。心根を曲げず、次に展開して行く自分を報告することで、その人への感謝の意としたいと思う。今まで本当にありがとう。 誠

information

次回コレクティブは春の開催を予定しています。詳細はブログでご確認ください。

<http://blog-collective.blogspot.com/>

Greeting from Pon Hardy

押忍！Pon hardyです。折角コラム枠を頂いたんだからという事で題材を調べてたら結局一週間悩む事になりました。

というのも、得意分野を書こう、というところ迄は良かったのですが、どれも書くに足らないものというかがっかりするものばかりだったんです。大体「足フェチが語る美脚の黄金比の秘密に迫る話」とか「日本語吹き替えのブルース・ウィルスのモノマネにいいよ磨きがかかってきた話」とか「天下一品のラーメンは今出川店のスープが若干濃くて良い話」とかって本当にどうでもいいじゃないですか。27年間何をやって来たんだよ、と。こんな感じでNOWAYOUTな日々を数日間悶々と過ごし、結局collectiveで出会った嫁と結婚したんだからそこ掘れワンワるしか道は無いのだ、とようやく結婚後の話題に辿り着いた次第です。

結婚してからは身の回りの景色ががらっと変わり、生活も大きく変わりました。帰宅すれば一平ちゃんの焼きそばではなく温かいごはんがあります。嫁のストップが入るのでノリノリで深酒をあおって潰れる事もなくなり健康的な生活も送れるようになりました。今は共働きなんですけど帰宅時間がずれているのでお互い自分の時間を結構作れていて、その自由時間を利用して薄汚い音楽をマイペースに作曲をしています。最近ではようやく普通免許を取得しまして(後述の理由で免許を持っていませんでした)中古ですが念願のマイカーをゲットし、土日は二人で京都や神戸に買物やドライブに行けるようになりました。学生時代には単身ワンルームで生ドラマのレコーディングに果敢にも挑戦し、裏に「死ネ」と書かれた鳥肌実のカードとゲイの写真をポストに入れられたり、うっかりアクセスとプレーキ間違えちゃ～事故(本当)と違反の併せ技一本で普通免許取り消しになったり、社会人になり西成区玉出に引っ越してもガバテクノがマイブームであまりのBPMの速さに階下の人間に家屋侵入され「殺ス」と目の前で言われたりと、不運meets自業自得の底辺人生を送っていた私にとっては平凡な毎日が今とても幸せです。

ところで報告ですが、嫁のお腹にアレが出来たのです。ポニョa.k.a脂肪じゃなくてベイビーです。有難く嬉しい話ですが、まだまだ器の小さい自分が人の親になる事に皆目検討がつかず、不安で毎日そわそわしています。先日も自分の器の小ささを再確認した出来事がありました。安産祈願に帯解寺へ行って来たのですが、買ったお札を返す時に「お札」に500円払わなアカン、という制度がありまして、私にはこの制度がどうしても不に落ちず、受付の萌え系についつい、「がめつ～」と口に出して言ってしまいました。今思えば願いが叶ったんだからその対価を支払う事ってまあ分かん事もないんです。500円ごときにこんなセコビツな私が立派なパパンになれるのかしら？今後の新しい課題です。でもでも、でもね？がめつくないですか？

旅行記 イタリア編 “mackiart”

こんにちは！今回は久しぶりに旅行記です。9月にスイスとイタリアへ1週間行程してきましたので。

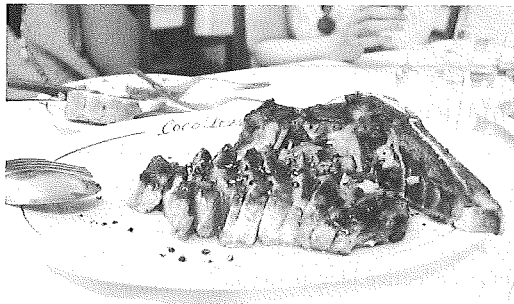
今回の目的は「同窓会」と、いいますのも、実は私高校生活の3年間をスイスで過ごしていました。簡単に説明をすると、スイスにある日本人学校で高校生をしていました。全寮制で生徒は全員日本人、だけど先生は半分以上外国人で、公用語は英語という変わったシステムでしたけどね。

その高校が今年創立20周年を迎えまして、記念式典があるということで久しぶりに母校を訪ねたんです。ついでにイタリアも。今回はさすがに1人ではなく高校時代の友人2人に母、そして母の妹とその息子の計6人と大所帯！どちらも濃い旅だったので今回はイタリア編、次回がスイス編と2部構成で書く事にします。

最初はイタリア編。今回私たちはフィレンツェに行ってきました。初フィレンツェの感想は「ちっちゃ！」映画「冷静と情熱の間に」の舞台でもある有名な観光地なので、空港もさぞかし立派で街並も壮大なスケールだと思いついていたのですが、空港ちっちゃ！街もちっちゃ！っていう感じでした。でもフィレンツェは昔の姿をほぼ留めている街並みなので、タイムスリップした気分になれます。ただ、街を散策していて不思議に思ったことが一つあります。車が街中を沢山走っているんですが、駐車場が一切見当たらないこと。路駐も無し。一体どこに車が消えているのかとても不思議です。

さてさて私の一番の楽しみといえば、やはり料理！今回も沢山食べたし飲みました。中でも今回一番感動した料理はフィレンツェ名物のビステッカという牛肉のたたきのような料理です。とにかくでかい。六人でやっと平らげられるくらいのサイズで立派な骨付肉だけに、肉食獣気分になります。インパクトもさながら味も美味しい！イタリアビールがすすむすすむ。生ハムもそうですけど、これでもか！って言うくらいでとくとすぐ幸せ感じてしまいます。ああ肉食女子・・・しっかり食べてイケメンで目の保養をし、いざスイスへ向かうのですが、飛行機が突然キャンセルになってしまったりとトラブルに見舞われました。が、続いてのスイス珍道中編は次回のプレスまでしばしお待ち下さい。

それでは皆様今回で今年ラストとなるcollective。沢山飲んで食べて踊ってお楽しみ下さい。そして少し早いですが、来年も宜しくお願い申し上げます。



極私的ハウス嘸 “itaru wakui”

「有名人とトークの巻」

地獄のような炎暑も過ぎ、冬近しいといった季節ですね。さて毎度おなじみのこの駄文、またしても本旨から離れつつらと、いまこの文章をつづる直前に起こった出来事について――。

一日の労働を終えた帰り道、いつもの駅を降り家に向かうワタクシの前を歩く三人組み。チラー一瞥すると、まだこの季節には早いだろうという真冬の着こなしをしたおしゃれな人です。

おしゃれさんだなあと思いつつ横を通り過ぎようとしたそのとき、一番着込んだ男性の声がかと耳に入りました。「ん、聞いたことある声。そしてこのファッション……。ひょっとして」と思い顔を覗いてみるとやはり！竹中直人ではありませんか！

なにを隠そう以前から竹中直人ファンのワタクシ。横に並んでつい「あの～、竹中さんですよ」と声をかけてしまいました。すると相手は「ハイ」。間髪いれずに「大ファンです」と手を差し出すと、竹中氏は手袋をとり右手を差し伸べ、がっしりと握手。このときワタクシは「手袋までしてたのか」と心のなかでツッコミをいれておりました。

並んで歩くことになったので思わず、「真冬の恰好ですね」というと「いや～、寒いでしょう。風邪ひきたくないからねえ」。渋い声です。風邪ひきたくないのは同感だが、それにしてもいまからコレでは真冬はどんだけ着込むネンという疑問が頭に浮かびつつ、「そうですね、たしかに(風邪はひきたくないですね)」とまったく渋さのない声で答えるワタクシ。

さらに「お仕事ですか」と尋ねてみると、太秦の撮影所で映画を撮影中とのコト。さらにさらにどこかに行っていたのかと聞けば、「部屋に行ってきた」そうで、古い布などどうやら良い買い物をしたらしく、いい店だったというようなことを何度も口にしていました。

そんなこんなでしばらく横を歩きつつ上のような会話をしていたのですが、やがて別れ道に。「じゃ、失礼します」的なことをいわれ、ファン心理からでた言葉が「あ、がんばってください！――ふりかえって歩き出したときにもうひとりの自分が「お前こそ」と囁いたのです。

てなことで、テンション低いときの不意をつく遭遇にドギマギしてしまった秋のひとときのレポート、お楽しみいただけましたでしょうか。ほんのさきほどの出来事ゆえ興奮冷めやらぬままの乱筆乱文で失礼しました～。